

アルケイアー記録・情報・歴史・歴史  
第一二号 二〇一七年二月 九一―一〇六頁  
南山アーカイブズ

## ジェンダー史と史料読解

―関係性の磁場を／から読む―

坂井博美

南山大学人文学部日本文化学科

---

### Gender History and the Historians' Reading of Historical Sources

Department of Japanese Studies, Faculty of Humanities,  
Nanzan University

SAKAI Hiromi

*Archeia: Documents, Information and History*  
No.12 November, 2017 pp.91-106  
Nanzan Archives

- 一 問題の所在
- 二 関係性のジェンダー力学を問う
- 三 「日記」群の内／間に内在する力学
- 四 史料の内／間を読む「私」

## ジェンダー史と史料読解

—関係性の磁場を／から読む—

坂井博美

### 一 問題の所在

本稿では、ジェンダー史研究における史料読解をめぐる問題について検討する。言語論的転回のインパクトを通過した後の歴史学は、研究対象の主体性をどう位置づけるかという問題とともに、歴史研究を行なう主体である研究者自身のポジショナリテイの問題と向き合わざるを得なくなつた。もはや歴史対象に対する純粹な客観的観察者としてふるまうことはできなくなつたのである。そうしたなか、『歴史学研究』は二〇一三年一月号から二〇一四年一月号までの三号にわたつて、特集「史料の力、歴史家をかこむ磁場—史料読解の認識構造—」を組み、九本の論文を掲載した。特集の巻頭言である「特集によせて」は、特集の問題関心と視角について、①「歴史家はどのような認識のもとに史料を読み解いているのか、史料読解の認識構造については思ひのほか議論されていない」という現状認識のもと、史料を読み解くことの認識構造を検討すること、②「とくに史料を残すことが少な

い人びとや位置づけが難しいテーマにかかわる史料読解の認識構造」を検討すること、③「言語論的転回後の状況をふまえた新たな史料読解論」の三つを挙げている。<sup>①</sup>このようにこの特集では史料読解の主体としての研究者をめぐる問題が焦点となっている。同誌は二〇一六年にも一月号と一二月号の二号にわたり、史料に関する特集「史料の歴史―権威・権力・アクセシビリティ―」を組んだ。この特集の巻頭言では、「史料が生み出されて利用されるにいたるまでの政治的・社会的・文化的文脈に着目し、史料が作られる過程での権威・権力、保存や公開の過程における情報の民主化・アクセシビリティの保障とプライバシーの保護、史料の価値の共有、公共財としての史料の位置づけといった問題について考えてみたい」と記されている。<sup>②</sup>前の特集では史料を読み解く研究者に、後の特集では研究者の利用に供されるにいたるまでの史料そのものをめぐる権力関係に焦点が当てられている。二つの特集の対象は史料についての異なるレベルの問題であるが、両者は接続している問題でもある。

いずれの特集でも、女性やジェンダーに関する史料や視点にまつわる問題が意識的に取り上げられている。その所収論考に刺激を受けつつ、本稿では、特集では必ずしも重点的には取り上げられていない、女性の書き物をもとに女性の思想形成と男女の相互関係性を検討する研究における史料読解の問題について、考察したい。私の博士論文は、二〇世紀初頭の女性の思想形成と男女関係に内在するジェンダー力学について検討したものであった。博士論文はその後、加筆修正して単行本にまとめている。<sup>③</sup>同書のあとがきのなかで、「二人の関係性を、男女の権力の非対称性や、そのなかにみられる相互依存性、そして互いに影響を受け合う双方向的なものとして捉え、そのような二人の関係の磁場を追った。今思えば、そうした「磁場」への関心は、私自身が生まれ育つなかで感じてきた、両性の関係性や「家族」なる場などにある奇妙な力学の息苦しさ、それに対する興味が関係していると思う<sup>④</sup>」と書いたように、男女の関係性の磁場に関心を抱き、その磁場の様態を明らかにしようとした研究であった。このよ

うな関係性の磁場を明らかにし、またその磁場をふまえて女性の思想形成を考察しようとした私のケースを素材にして、そうした研究と史料、研究者という主体の間のつながりを、検討したい。

以下、「二」では、私が上記の研究テーマと視角を選ぶにいたった経緯と背景、史料読解の過程とのつながりについてふりかえる。「三」では、そうした経緯を経て身につけた視角から史料読解を行なっていく過程で浮かび上がった問題について、考察する。具体的には、複数存在する清の「日記」を主な史料にして、それらの日記群をとらまく磁場の様相について考察する。そして、最後に、「二」と「三」の接点も含めて、議論をまとめた。

## 二 関係性のジェンダー力学を問う

私が二〇〇〇年度に提出した修士論文と二〇一一年度に提出した博士論文はいずれも、日本近代の女性の思想と両性関係を、一九一〇年代に女性雑誌『青鞥』を刊行したグループである青鞥社のメンバーであった岩野清と、その夫で自然主義作家の岩野泡鳴という夫婦を素材として検討するということなのであった。

一九九九年に大学院修士課程に進学した時点から主に女性史・ジェンダー史的視点からの研究を行ないたいと志していたものの、二年生になっても修士論文のテーマ決定に難渋し、無方針のまま『青鞥』復刻版や『青鞥』に関する先行研究などを読んだ。その過程で興味をもったのが岩野清であったが、その「興味」は肯定的な感情のみでなく、清の言動への違和感や困惑といった感情にも由来していた。

清は、「新しい女」を自任し、『青鞥』などの媒体に女性論を中心とした評論や随筆、小説を発表した。露悪的な作風をもつ泡鳴と『青鞥』の清の結婚生活は、社会の注目を浴びた。また、当人たちも暮らしぶりを積極的に語った。

泡鳴との同棲開始時には二人の邂逅から同棲に至るまでの経緯と心情を泡鳴とともに新聞記者に語り、その内容が『万朝報』（一九〇九年二月二日付）に「変者同士の同棲 ▲肉が勝つか、霊が勝つか」というタイトルで掲載された。記事は、泡鳴が清に同棲と「肉交」を要求したのに対し、清は友人として同棲には応じたものの、今のところ恋愛感情はないとして「肉交」は拒絶していると二人が語ったと報じている。その後、彼らは結婚するが、夫婦関係は愛情のみを紐帯に維持されるべきであるからいづれかの愛情が失われた際には別れると、双方ともに宣言していた。また、両者とも、男女が対等な存在であることを主張する女性論を多く執筆し、女性の経済的独立の必要性を説いた。しかし、泡鳴に蒲原英枝（彼女もまた青鞥社のメンバーであった）という新しい恋人の存在が発覚した直後には、泡鳴いわく、「英枝氏にあまり野心を生ぜさせぬ範囲に於て、この関係を許してくれることになつた」という対応を清はとり、後には蒲原を「妾」だと述べるなど二人をメディアで非難した。そして、泡鳴が家を出て蒲原と同居を開始した後には、清は女性全体の権利を守るためだとして泡鳴の同居を請求する裁判を起し、裁判のさなかに、泡鳴との邂逅から別れまでの「日記」を『愛の争闘』（米倉書店出版部、一九一五年）というタイトルで出版した。メディアはこのような清の姿を、「いかに新しがつても、又いかに賢げに見えても、矢張在来日本婦人の型を丸出し」だとか、生活上の不安があつたとしても自分への愛を失った相手の形式的な妻の地位に固執しないで潔く離婚すべきだなどと批判し、『青鞥』の女性たちの多くも清への違和感を表明した。

また、日本文学研究者の紅野敏郎も、前述の清の著作『愛の争闘』について、「実際にこの『愛の争闘』を読んでもみると、むしろ当時の「新しい女」の、いわば飛んでいる、いい気な要素が強く、人の心を激しくつき動かす力は意外に希薄。愛の争闘、それ自体で清子がどのように真剣に悩んだのか、さだかにし難い部分のほうが多く、興味をそそられるのは、泡鳴をとりまく交友関係のほうにあるように私には思える」（傍点は原文ママ）、「新しさを誇

示した愚かな女、と私には思える。少くとも賢明に生きた体臭というものが伝わって来ない」と評している。<sup>7)</sup> 私自身も清に対し、平塚らいてうに代表されるような他の「新しい女」と名指された女性たちに付与されてきた一般的イメージとはかけ離れ、言動が上滑りかつ過剰であるような、スマートさに欠けるものを感じ、辟易する感情を覚えたのである。しかし、同時に彼女の苦悩は本当に深く、彼女のふるまいも大真面目になされているようにも思え、そのような清に非常に興味を覚えた。これが岩野清について検討してみようとしたきっかけであり、この人物のあり方が当該期の社会を考えるうえでどのような意味をもつか、いまだ見通しはついていなかった。

清の執筆や裁判闘争等の活動で最大のテーマとなつていのは泡鳴との軋轢であり、彼女について研究することを決めたのちは、二人の小説や評論・随筆・日記、泡鳴との邂逅前に清が教員採用に際して提出した履歴書、清の新聞記者時代の執筆記事、裁判関連の史料、彼らについて報じた新聞・雑誌記事、知人たちの評論や回顧録などを収集、精読した。清と泡鳴の執筆物を並行して読んでいく過程で、清の発言や思想、作品、訴訟実践などが、泡鳴からの影響を強く受けており、かつそうした影響が実に複雑な形をしていることに思い至った。同時に、泡鳴も清の存在から影響を受けていることに気づいた。

当初、清と泡鳴の相克を別個の強固な殻をもった主体対主体の争いという枠組みで考えていたのは私の解釈の未熟さゆえであるが、それは研究史に規定されたものでもあった。これまで、『青鞥』周辺の人びとを含めて女性の思想形成については研究が積み重ねられてきたが、そこでは、その人物が社会的差別に対峙し、一人で、あるいは同様の経験をもつ集団との接触のなかで、女性を取り巻く問題を乗り越えるための思想を形成していったことが強調されることが多かった。その背景には、「女性の思想や言説について、その自律性や独自性が軽視され、男性思想家—それは対象女性の夫、恋人であることが多い—の理論の模倣に過ぎない稚拙な思想とみなされ、矮小化され

てきた歴史<sup>8)</sup>」に対抗する必要があるだろう。このことは常に念頭に置くべきではあるが、それと共にやはりその女性と男性たちの影響関係とそこに作用している権力関係、力学をつぶさに検討することも重要である。

そうして岩野夫妻の関係性に着目して史料をみていくと、清の女性論や実践は、泡鳴の生活上の利害や、上の世代の知識人たちに対抗し「新しさ」を標榜する彼のアイデンティティ確立の欲求、承認欲求の充足願望が影響を及ぼしている様子が浮かび上がった。泡鳴の側も清の社会的活動から影響を受けてもいて影響関係は双方向的なものであったが、ジェンダーの権力関係の作用によって、やはり泡鳴から清への影響のほうがより複雑で大きいものであった。「新しい女」を自任する清のあり方は、清と泡鳴との共犯関係とジェンダー非対称性によって立ち上げられたものであったといえる。女性の経済的独立の必要性を説く彼らの主張も、実生活では基本的には性別役割分担型の暮らしをしていた岩野夫妻においては、泡鳴側を利するものであることが、二人の婚姻生活の破たん後に明らかになった。

一方で、泡鳴との間の葛藤を描いた清の小説は、男女関係を暴露的、醜悪に描く泡鳴の作風が前提にあったために生み出されえたものであった。清の小説は泡鳴を根本的には脅かすことにはならなかったが、泡鳴の小説世界に入り込みつつ、その内部から彼を批判する視点を備えたものであった。また、当時ほとんど類をみなかった妻側からの同居請求訴訟を清が起こした背景にも、結婚生活時、泡鳴が様々な紛争解決に弁護士を活用する様子を身近でみていた影響が挙げられるが、清の訴訟行為は同居時の泡鳴の想定を飛び越えるものであったろう。別居・離婚後の清は、女性の母役割や男女の違いを強調する女性論へと転回していく。それは、そうした思想のほう彼女の実生活に利するものであったからであるが、こうした女性論は当時浮上しつつあった近代家族の家族規範・性規範と軌を一にする側面があり、新たに再編されたジェンダーの差別構造に影響をうけ、同時にその構造をつくりだすも



のでもあった。

修士論文執筆時は、男性史という視点を明確に打ち出した研究はまだほとんどなかったが、男性史と名乗ってはいないものの、近代の知識人男性の論理や「両性の相剋」を検証した黒澤重里子による論考<sup>9)</sup>に大きな示唆を受けた。その後、二〇〇〇年代になると阿部恒久・大日方純夫・天野正子編『男性史』全三巻（日本経済評論社、二〇〇六年）が刊行されるなど、少ないながら男性史が姿を現し、その風潮に影響を受けて、私はいつそう泡鳴の側のあり方に関心をもつようになった。

また、人と人の間にある磁場への関心は、私自身の生活体験にも由来していたと考える。先述の『歴史学研究』「史料の力、歴史家をかこむ磁場」特集号に所収された藤野裕子の論考<sup>10)</sup>は、安丸良夫が『方法』としての思想史<sup>11)</sup>においておこなった議論を手がかりのひとつにして書き進められている。安丸は、歴史研究者の歴史認識は、「(i)史料とそこから導きだされる歴史上の「事実」、(ii)私たちが生きる現実世界の全体性、(iii)(i)と(ii)に向きあっている私という個の内面性という三つの次元、契機をも」つと論じる。藤野はこれに加えて、①「歴史家集団の規定力を含めた現実世界の全体性」に「常に自覚的であること」と、②研究者の内面が「何」によって構成されているかにより鋭敏であること（傍点は原文ママ）の二つを、史料読解におけるの重要要素に挙げている。以下に述べる私の個人体験は、安丸の整理に倣えば特に(iii)に、また(iii)の背景としてある(ii)に関わるものであり、私の個人的事柄についてふりかえるのは、藤野が指摘する②の問題を考えるためでもある。

「一」で引用した拙著のあとがきの「私自身が生まれ育つなかで感じてきた、両性の関係性や「家族」なる場などにある奇妙な力学の息苦しさ、それに対する興味が関係していると思う」という部分は、主に、アルコール依存症にかかった亡父とそのパートナーとしての母の関係性とその変容を念頭に置いている。アルコール依存症の患

者とそのパートナーは非常に大きい葛藤とともに共依存関係も強い。依存症の家族のいない家族関係もそのような軋轢や共依存、共犯関係は存在するのだが、依存症の家族のいる「家庭」ではそれがとても大きな形で表面にあらわれるのである。そうした引力が奇妙にゆがんだ家族という場を、私は子どもとして直接・間接的に体感すると同時に、両親を傍観的に眺めていた。また、父親がアルコール依存症になった背景、そして依存症患者としてのあり方は、男性依存症患者について指摘されているように「男らしさの病」という性格を強く帯びていたように思えた。そして、父と父の患った依存症に対する母の対応とその後の決断は、女性を取り巻く状況の困難性と可能性が見えるようにも感じた。男女関係における男性側への着目と関係性の「磁場」に対する私の関心は、こうした経験と強く結びついていたのである。今から思えば、当初、岩野清について困惑と若干の嫌悪感、そして強い興味を覚えたのは、ひとつには、現在のこうした男女の関係性の力学に通じるものがあるように感じたからではないかと思う。そして岩野夫妻の事例を検討することは、自分自身による「治療行為」でもあり、また、私自身の家族関係を深く考えることにもつながったのではないかと思う。しかし、こうした経緯は、私の置かれた環境に触発された視点から作り上げた歴史像であり、それによって矮小化・肥大化したり、見えなくなったりした部分もあるかもしれない。このことを常に自覚的に検証していく必要があるだろう。

### 三 「日記」群の内／間に内在する力学

複数の史料間の関係性を考えることを要した問題のひとつに、清の「日記」がある。清の「日記」史料のなかで最も有名なのは、前述した『愛の争闘』（A）である。泡鳴との同棲初日からの約一年半と、泡鳴が蒲原英枝との

関係を告白した日から別居に至るまでの約半月の二つの期間の日記として、別居中に刊行された。同書は泡鳴や清についての研究において、彼らの生活の一端を示す材料としてしばしば引用されてきた。

しかし、清の「日記」はこの一冊に留まらない。泡鳴との同棲前から清は日記（B、現存は確認されていない）をつけていた。そして、清はしばしば、「日記帳の中より」、「日記の断片」など、日常つけている日記の抜粋であることを仄めかす日記体の文章を雑誌に寄せている（C）。また、謎が多い史料として、清の死から六年後（泡鳴の死から数えると六年半後）の一九二六年に「泡鳴庵日記」というタイトルで『婦人公論』に掲載されたものがある（D）。同記事の編者の手による前書きには、清の書いた同棲初日からの日記を入手し、同棲開始後一年間の中から泡鳴との生活を中心に抜粋したと記されている。さらに、清との生活を題材にした泡鳴の小説に『征服被征服』（初出は一九一七—一九一九年）があるが、この作品内では「澄子」（清がモデル）の日記がたびたび引用されている（E）。

これらの「日記」群を互につきあわせながら読むなかで浮かび上がったのは、各史料のなか、そして複数の史料の間に内在する権力関係、自身の名を上げたいという両者の欲望、名誉を守るための夫婦間の抗争であった。AとD、Eの史料は内容が異なる点があるが、もともと大きい異同のひとつはセクシュアリティに関する部分である。それは、DとEにおいて岩野夫妻が最初に性交渉を行なったことを仄めかしているある日の記述内容と、Aにおける同じ日付の記述の内容が異なることである。DとEの史料にみえるその時期は同居開始後、早い段階であり、両史料の文章は子細な点を除いてほぼ同一である。一方、Aではこの日付の記述の内容は全く異なり、性的関係の有無について曖昧な表現がなされている。同棲当初から両者は、性的関係をめぐって考え方の違いをもつことを公に表明していた。男性からの性交渉の要求に安易に応じないというふるまいは、清が男性からの自律性を主張し、泡

鳴優位の権力関係を消滅させようという欲求によるものであった。したがって、Aの刊行にあたり、同棲当初の宣言とは異なりあまりにも早く性的関係にいたったと記すわけにはいかない。そのような背景が、史料間の相違を生む要因になったと考えられる。『愛の争闘』は、婚姻関係の破綻後の生活のなかで、清自身の正しさを世に示し、泡鳴を批判することを目的に、Bをもとに加筆修正をしたものと考えられる。一方で、泡鳴の『征服被征服』も清と決別した後に発表されたものであり、自身の立場の正当性と清への批判を世に示すという性格をもつ。したがって、「澄子」の日記の引用として書かれた『征服被征服』内の記述（E）は、彼女の思想・言動の稚拙さなどを表すものとして使われている。

「日記」群の性格の違いは、この問題以外にも存在する。たとえば、日記の抜粋という形式をとるC群は泡鳴との結婚期間中に発表されているが、これらでは孤独感や夫婦喧嘩をしたことは記されてはいるものの、泡鳴との関係性自体を説明する際には、泡鳴の家庭でのふるまいや女性観の先進性が強調されている。泡鳴別居後に出版されたAとは、掲載されている「日記」の日付にずれがあるため、内容上の単純比較は難しいが、Aが全体的に夫婦の相克と泡鳴の身勝手さを強調した内容となっていることに比べると、かなり異なる性格を帯びている。Cは、泡鳴に対する配慮と同時に、清が進歩的な女性という立ち位置で夫婦双方の生活と思想の先進性をアピールした作品と考えられる。

では、清が同棲当初から書いていたらしいBの性格はどのように捉えればいいのか。Bはそれ自体としては社会への公開を意図したものではない。しかし、泡鳴はしばしばこの日記を見ていたらしく、Aの一九一一年一月一六日条には、泡鳴が清の日記を「検閲」し、その内容について、「ロマンチストに限って無意味な事を書く。樗牛なんぞもさうであつた。と云つた」と記されている。Bは、すでに著名な小説家であつた泡鳴が、清に泡鳴自

身の好むスタイルの文章を指導する材料になっていた。このようにBは泡鳴の視線を意識して書かれたと同時に、清の日記を綴る行為は、すくなくとも同棲当初においては、清自身が将来的に友人関係から恋愛への発展という物語を成し遂げることを企図してなされていたようにも思える。これらの意味において、Bもまた清の作品である。

「日記」群に内在する力学は、清の死後にも作動している。たとえば、Dは雑誌掲載に至るまでの経緯に謎が多い。詳しくは『愛の争闘』のジェンダー力学』第三章で論じた通り、泡鳴の『征服被征服』の執筆過程と関連している可能性もある。先行研究では、『征服被征服』内の「澄子」の日記(E)は、同棲時に泡鳴が清の日記(B)をあらかじめ筆写して、それを参照したのではないかと推測されている。そしてDは、泡鳴が書き写した内容をもとにしている可能性が存在するのである。なお、Eは『愛の争闘』(A)も参照している形跡がある。

以上からもわかるように、これらの清の日記群は、互いに参照されながら生成されたものであり、それぞれの史料とそれが執筆・発表され、読まれる場には、欲望、対抗、ジェンダーなどの権力関係が混在し、内包されているのである。そして、岩野泡鳴の全集の別巻(『岩野泡鳴全集』全一六巻・別巻一冊、臨川書店、一九九四～九七年)のなかに収録された『愛の争闘』(A)や、私が拙著のなかでA～Eの史料の一部を抜き出し私の議論に埋めこんだA～Eの断片もまた、同様の性格を内包した史(資)料であるともいえ、同じように内部に埋め込まれた力学が問われる。

#### 四 史料の内／間を読む「私」

「三」で特に検討した史料の内／間にある権力関係や相互連関は、「二」で取り上げた私が歴史学研究という場を背景にして、それらの史料を読み、執筆、発表した論考の中にもまた含まれるものである。男女関係の力学・磁場を読むということは、結局のところ、史料内／間にある微細な力学を読むということであるが、そのなかで浮かび上がった歴史像は、現在を生きる私が過去、そして現在置かれている男女関係の磁場を直接的・間接的に体感したフィルターを通して再構成されたものであり、死角等も存在するであろう。このようなあり方は当然私自身の研究においてのみでなく、常にすべての研究の生成過程で起きている事態である。

一九七〇年代頃から盛んになった女性史とその後に誕生したジェンダー史は、近年、その第一世代の研究者の回顧録やインタビューが散見されるようになったものの、未だ少ない状況である。戸邊秀明は史学史全体の課題として、「歴史実践の主体、すなわち歴史家論」の必要性を指摘し、「エゴ・ドキュメントや記憶論、ジェンダー分析等の観点」を組み込んだ研究の可能性を提示している。<sup>15</sup>これは当然、女性史・ジェンダー史、そして男性史研究者にも当てはまる問題である。凡庸な研究者である私が、研究の個人的背景を含めて考察した本稿は、そうした関心も意識してなされたものである。七〇年代以前を含め、各時期の研究者の経験や日常生活との関係性を組み込んだ研究史・史学史の検討を積み重ねることは、ジェンダーを組み込んだ歴史研究の課題を浮かびあがらせ、新たな視点を生み出すことに繋がると考える。

なお、本稿では男女間の関係性のみ焦點を絞って論じたが、男女の関係性は、男性間や女性間の関係性との連関をも含めて捉えるべき事柄である。同性間の関係性に関わる史料読解の問題を含めた検討は、稿を改めて検討し

たい。

註

- (1) 歴史学研究会編集委員会「特集によせて」『歴史学研究』第  
九一二号、二〇一三年一月、一頁。
- (2) 歴史学研究会編集委員会「特集によせて」『歴史学研究』第  
九五一号、二〇一六年一月、一頁。
- (3) 坂井博美『『愛の争闘』のジェンダー力学—岩野清と泡鳴  
の同棲・訴訟・思想—』ぺりかん社、二〇一二年。
- (4) 同前、三八五～三八六頁。
- (5) 岩野泡鳴『菓嶋日記第二』一九一五年七月二十六日条（岩野  
美衛著、岩野泡鳴全集刊行会編『岩野泡鳴全集』第一四巻、  
臨川書店、一九九六年、一五八頁）。
- (6) 雲舟「婦人と時勢」『読売新聞』一九一五年八月二十五日。
- (7) 紅野敏郎「岩野清子と泡鳴『愛の争闘』」『国文学解釈と  
教材の研究』第三二巻第二号、一九八六年二月、一四九頁。
- (8) 前掲、坂井『『愛の争闘』のジェンダー力学』、九頁。
- (9) 黒澤亜里子「近代日本文学における『両性の相剋』問題  
——田村俊子の「生血」に即して」脇田晴子、S・B・ハ  
ンレー編『ジェンダーの日本史』下、東京大学出版会、  
一九九五年。
- (10) 藤野裕子「表象をつなぐ想像力—ルポルタージュ読解試論  
—」『歴史学研究』第九一三号、二〇一三年二月。
- (11) 安丸良夫『方法』としての思想史』校倉書房、一九九六年、  
二九～三〇頁。
- (12) 『淑女画報』第一巻第五号、一九一二年八月。
- (13) 『青鞥』第二巻第五号、一九一二年五月。
- (14) 遠藤清子『泡鳴庵日記』『婦人公論』第一一年第一号、  
一九二六年一月。
- (15) 戸邊秀明「史学史と歴史叙述——近現代史学史を窓として」  
歴史学研究会編『第四次現代歴史学の成果と課題』第三巻、  
續文堂出版、二〇一七年、二二四～二二五頁。

# Gender History and the Historians' Reading of Historical Sources

SAKAI Hiromi

## Abstract

In this paper, the author considers the relationship between a man and a woman which act on the formation of women's thought from viewpoint of gender dynamics. Gender dynamics exists in the relationship between a man and a woman, therefore, it forms a kind of magnetic field as if close/leave of a man and a woman.

Specifically, the author analyzes IWANO Kiyō's and IWANO Homei's works, acts and others. Kiyō's diaries were written by mutually references and were made by asymmetric gender dynamics. We have to read in/among such diaries. But the result of our reading is also viewed through the present gender filter which surrounds us.

The theme in near future is that researcher of gender themselves consider the relationship among them.